

〔論 説〕

神宮の本姿 (二)

——第三章 外宮の主祭神——

江 口 洵

目次

第三章 外宮の主祭神

天武天皇の伊勢参詣／天武天皇から崇神天皇へ／崇神天皇から神武天皇へ／「元明書紀」の改変／「元明書紀」から『書紀』への証明／創造主の神々／外宮の主祭神／タカミムスヒノミコト／アマテラスの誕生／祖母神と皇孫の関係の誕生／二宮の陰陽の関係

第三章 外宮の主祭神

天武天皇の伊勢参詣

崇神天皇が「はつくにしらすすみらみこと」と称えられたのは、『日本書紀』（以下『書紀』）よりも前に構想された「天武書紀」の段階でのものでした。そして、『書紀』完成（720年）よりも30年も前、692年には、持統天皇によって、皇祖霊の再生祭を意味した第1回の遷宮は、既に行われ

ていたのです。その時の遷宮祭が、今に続く外宮の遷宮であり、『書紀』が設定した内宮の遷宮よりも、そちらの方が歴史的に古いのだということを前章に述べてきました。

さて、外宮の第1回遷宮は、天武即位年（673）から数えて一九年後の692年でした。遷宮をするということは、その遷宮の対象となる古い神の宮があつた筈です。本当に673年、壬申の乱の翌年ですが、伊勢にその神の宮が創祀されたでしょうか。

天武は、壬申の乱に勝利した後に、何らかの形で、皇祖神への感謝を表したと考えていいでしょう。神への感謝は、勝利の直後になされるものでしょう。そう思つて、古い記録を見ていると、『大神宮諸雑事記』に次のようにありました。

天武天皇は壬申の乱の年、大伴（大友）皇子の謀反の時に、伊勢太神宮に祈願し、乱に勝利した、そこで皇女を御杖代として、奉仕するようにした。そして、その二年九月一七日に天皇が伊勢に参詣した。

天武二年、つまり天武即位年に、天武が伊勢に参詣したとある記述には注意したいのです。そして、この参詣に関しては、或本として、「天皇が参着した」、また別の或本として、「飯高郡から望拝した」と書き加えています。望拝とあるのが、壬申の乱の時の朝明郡からの望拝との混同かと疑うのですが、これは、飯高郡からとなっていますから、壬申の乱の時の望拝との混同ではなくて、或本と呼べる別の伝承があつたのだと言えそうです。

この『大神宮諸雑事記』は、平安時代になってからの記録とはいえ、荒木田二門という内宮の神官の家に伝わったもので、貴重な史料です。右の天武自身が、即位して直ぐ伊勢参詣したと伝えている記録には関心がいきます。その年に、外

宮の創建がなされたと考えられるからです。また、内宮伝承の資料に、その年次が残されているのは、古い資料があったことが考えられます。

この外宮の創建年に当たる年に、天武自身が伊勢に参詣したという記録が、内宮関係の家に伝わっている記録ですから、不思議、いや貴重です。いや、その伝承こそ、内宮も外宮もない、神宮そのものの創建年として伝えられていたと、考えてよいのかもしれない。

天武天皇から崇神天皇へ

いままで、繰り返して、天皇の聖数ということを説いているのですが、この小論では、特に一九という聖数を中心に扱っています。『書紀』を見ると、先行した天皇の即位年、また崩御年などと後続天皇の即位年とを、この一九年という聖数で結びつけられています(表1)。

(表1)

一九年関係			
天武	2代	綏靖 (即)	(崩)
	10代	崇神	(崩)
持統	1代	神武 (即)	(崩)
	5代	孝昭	(崩)
文武	11代	垂仁 (崩)	(崩)
	6代	孝安 (崩)	(崩)
	7代	孝靈 (崩)	(崩)
	8代	孝元 (崩)	(即)
	9代	孝開 (崩)	(崩)
	12代	景行	(崩)
元明	1代	神武 (崩)	(誕)
	10代	崇神	(誕)
元正	8代	孝元 (誕)	(誕)
	3代	孝安寧	(誕)
聖武	2代	綏靖 (崩)	(即)
	3代	安寧	(即)

〔注、表1は、初代神武から12代景行までの天皇たちと、天武以降の天皇方の、一九年(その倍数年)で結ばれている関係です。(誕)(立)(即)(崩)は誕生年、立太子年、即位年、崩御年の略。天武は2代綏靖と10代崇神と、持統は初代神武と5代孝昭と結ばれている、と見ます。〕

「十九年七閏法」について再び説明します。太陰太陽暦では、一九年というのが1単位になっていて、その間に、7回閏月を入れる方法で、太陰の周期時間を、太陽の周期時間に合わせるのです。つまりは、一九年は、暦の計算が元に復する年数です。特に太陽の復活の日である冬至が、月の復活の日である朔と重なるのは一九年に1度ですが、それを朔旦冬至といえます。太陽と月の同時復活の日です。中国の朝廷では、既に早くからその日に祝宴を開いていたのです。

満一九年は、暦の上で、太陰と太陽とが同時再生するのに要する年数です。中国では、暦の改まる年として祝ったのです。それが日本では、日の皇子たちの再生の年数として説かれ、信仰されたのです。それ故に、一九は、天皇家の聖数とされた数字です。

692年に遷宮祭を行ったという事は、前章に書きましたが、その年が、天武即位年(673)と一九年関係にあつて、天武天皇の威霊が、そして、天武が祭った皇祖霊の再生する年に当たっていたからです。

天武は、壬申の乱を征して皇位についたのですが、古代の歴史観では、それは、勝運あつて、天武が勝利したのではなくて、歴史的に約束された勝利であり、時間を上古代に遡ってみると、天武と同じような大王が必ず居て、地上を征服した筈だ、その大王の威霊が天武に再生し、天武は地上の征服者となったのだ、と考えるのです。その大王の名前こそ「はつくにしらすすみらみこと」と称えられた崇神天皇です。

天武即位年を一九年ごとに時間を遡って行くと、崇神崩御年(前30)に出会いました。その間は703年。外宮の第1回遷宮から遡って見て、その関係は、

崇神崩御年（前30年）

← 703年（一九年×37）

天武即位年（673年）

← 19年（一九年×1）

外宮第1回遷宮年（692年）

という事になっていました。外宮の第1回目の遷宮は、実質は天武王朝の出発の年を意識したものでありましたが、歴史的には、崇神を皇祖として意識したものであったということになります。

参考：内宮の第1回遷宮年（690年）の場合を見ますと、

神武即位年月日（前660年1月1日）

← 満1349年（一九年×71）

持統即位年月日（690年1月1日）

という関係ですから、内宮の遷宮は、神武即位年と持統即位年を結ぶ一九年の関係線上に設定されていることになります。持統即位年が内宮の第1回遷宮年ということになります。とは、その一九年前に、遷宮の対象となるべき神宮が創設されていなければならない筈です。そこで持統即位年の690年を一九年遡ると671年ですが、その年はどんな年だったのでしょうか。年表を見ると、この年は天智天皇の崩御年となっています。そして、その次の年が壬申の乱の年です。そうして見ると、671年に、伊勢に神宮（内宮）らしいものが創設されたとはとても考えられません。

先に書いたように「天武書紀」では、天武即位年は、初代崇神の崩御年とはなくて、その天皇宣言年（前86）と一九年関係で結びついていでしょう。しかし、天武の後に、持統から聖武まで5代が、『書紀』の紀年構成に加わってきます。また上古代史として、崇神よりも前に9代の天皇が加わ

り、特に初代天皇の神武が存在することになります。すると、持統以降の天皇方も神武や上古代の天皇方との関係を必要とします。そして表1のように一九年関係を創りあげているのです。

天皇史は、できる限り多くの天皇を聖数で互いに結びつけるのが理想なのです。即位年と即位年との結びつきだけでは、先行天皇の数も少なくして歴史（聖数による関係）が思うようには組めないのです。そこで各代天皇の即位年、崩御年はもとより、その誕生年、立太子年も案出されて、各天皇のそれぞれの年次が紀年構成の中で活用されてくるのです。この点は、順次具体的に紹介します。

自分は、先祖の霊を引き継いでおり、さらに、その霊は子孫によって引き継がれていく同一の霊格なのだというのが靈魂信仰の基本部にあります。天皇家は、その信仰に、形式を与えています。「大嘗祭」です。天皇家最重要の、秘儀とされる祭祀です。この祭儀を、定式化したのは天武時代になってからとされています。

そこに加えて、中国式の即位儀礼を真似ているところがありますが、目に見える天皇位継承の形式として、タカミクラ、つまり高千穂への回帰という儀礼が加わってきます。

そして、そのような天皇霊継承の形式化と時を同じくして、中国の、『漢書（律曆志）』などに見られる古代史組み立てに用いられた暦法が、日本の知識層の中で理解度を深めてきます。時間という観念そのものが、歴史観の基本となってきました。そして天皇霊の回帰年数を教える「十九年七閏法」に則って上古代史が構成されていくのです。

ここまで取り上げて来た太陽の再生を示す一九という暦数は、『漢書』『律曆志』の中では、天（陽）の数9と、地（陰）

の数10とを併せて19として、窮まれば変化する『易』の数字として説明しています。そして、1539年を一統、3統の4617年を一元としています。一統の1539は一九の81倍、一元の4617年は一九の243倍です。

『漢書』での一九年の用法は前著で紹介しましたが、その例を再録しますと、

1、丞相の属官宝・長安の単安国。安陵の梧育^{はいいく}は「終始」を治めて、黄帝以来三千六百二十九歳であると言ひ……。

2、漢暦によれば大初元年は上元以来十四万三千百二十年歳である。

などとあります。

1は、一九年×191です。

2は、一九年×7533です。

他に、『漢書』から拾った例は、前著に挙げておきました(1)。また、『漢書』ではない中国史料からの例は、『古代文化と聖数』で紹介しています。とに角、中国での時間の決定法のひとつに、一九年を一つの単位としている例があるということです。

とに角、崇神と天武とを強く結びつけていた「天武書紀」を継承したその後の修史作業にも、その2天皇は結び付けなければいけないという強い歴史観があったのです。

もう少し、天武と崇神との関係を書きます。まず、両天皇の立太子年関係です。崇神の立太子年は「御間城入彦^{みまきいりひこ}を立てて皇太子」(開化天皇二十八年条)とある前130年です。天武の方は、「天命開別天皇元年に、立ちて東宮と為りたまふ」(天武、即位前紀)とある668年です。両天皇の立太子年の関係は、年数で798年の間隔です。それは一九年の42倍の数値です。

崇神立太子年(前130)

←798年(一九年×42)

天武立太子年(668)

です。崇神の立太子年が、天武のそれに一九年関係で合わされて、前130年となっているのです。

もう1点、崇神の四道將軍派遣の年に注意してみます。先に挙げた崇神の天皇宣言の2年前の崇神十年条には、地方制庄のために、崇神天皇が四道將軍を派遣したとする話があります。

今既に神祇を禮^{うやまつ}ひて、災害皆耗^{つぎ}ぬ。然れども遠荒^{とほき}の人等、猶正朔^{のり}を受けず……。九月の丙戌の朔甲午に、大彦を以て北陸に遣す。武渟川別をもて東海に遣す。吉備津彦をもて西道^{にしのみち}に遣す。丹波の道主命をもて丹波に遣す。

崇神は、「神祭りがうまくいって、災害もなくなった。しかし、都から遠い地方は自分の支配下にならない」と言って、まだ治まらない地方である北陸に、東海に、西道に、そして丹波に將軍たちを派遣したのでした。

右の四道將軍派遣の年は前88年のことでした。この年から天武の壬申の乱の年までを数えると、その間760年です。

この関係は、

四道將軍派遣年(前88)

←760年(一九年×40)

天武壬申の乱の年(672)

です。これも一九年関係です。この四道將軍の派遣年は、天武の壬申の乱を意識して、その年から一九年の40倍にあたる前88年に設定されているのです。

この一九年の4倍である七十六年は、暦法では一都^{いちと}と呼ばれるものです。一九年間に生じる陰陽の誤差(約0、24日)を

4年目に1日として、暦に加えることで、日月の誤差が殆んどなくなるのです。この七六年は尊重されて、『書紀』にも用いられています。例えば、神武天皇の在位年数は七六年間、7代孝靈天皇の在位年数も七六年間と設定されています。

崇神天皇から神武天皇へ

『書紀』を見ると、右の四道將軍の派遣よりも500年ほども前に、神武という初代の天皇がいて、次のようなことを言っています。

天孫ニニギノミコトが降臨して、この国を治め始めてから、もう百七十九万二千四百七十余歳も経ったのに、まだ国は治まりきっていない。東に美しい地があるから、そこへ向かいたい。

と。神武は東征を宣告し、やがてこの国を征服し、橿原で即位して天皇となっているのです。それなのに、この「崇神紀」によると、実は丹波も東海も吉備地方も征服されずにいたということになっています。そこで四道將軍を派遣して、その2年後に、崇神は最初の天皇と讃えられたことになります。右は、征服譚の繰り返しということになります。それは、歴史の真実が征服と反乱の歴史であったからだと言う人もいるかもしれませんが。確かに歴史の真実はそうであったでしょう。王権の交代はあったでしょう。しかし、神武と崇神との、この征服譚の重複性は、歴史の真実を映しているのではないのです。これは、先にも触れたところの『書紀』の成長の重層性を反映しているのです。

古代の宗教的信仰の基本には、歴史は繰り返す、時間は円環し続けるという認識法がある、という事は述べました。目の前でいかに不思議な現象が起きても、それがその時だけの

もの、一過性的なものであったら、それは、何かの吉凶の対象、また、天変地異だったら天の警告とかに解釈されます。

歴史性というのは、現実の現象が、過去と時間的に関係を持つていうことを言うのです。以前に起きた現象が一定の周期を守って繰り返される時に信仰の対象になるのです。従って信仰によって創られる歴史は、一定の周年年数で古代に遡ってその起源を求めるということになります。

さて、『書紀』でも、崇神と天武との立太子年、また、天武の壬申の乱と崇神の四道將軍派遣とを聖数で整えているのですから、天武と崇神との関係は極めて密なるものが意識されていた訳です。そして、歴史をさらに上古代に引き延ばし、新たな初代天皇神武を創造する時に、既に征服者像としてある天武、そして崇神が、新たな神武天皇の原像として作用することになるのではないのでしょうか。

わたくしの重視する聖数での観点からすれば、次の二つの関係の↓印の部分が聖数によって整合化されていることが予想されます。

神武東征年↓崇神四道將軍派遣年↓天武壬申年

神武即位年↓崇神即位年↓天武即位年

つまり、お互いの征服時点、そして、その即位年どうしの関係の、そのふたつの関係線がきれいに一九年関係で並ぶのが理想的なのです。しかし、それは少し乱れています。

神武東征年と重ねられているのは崇神の即位年の方です。

東征年(前667)

←570年(一九年×30)

崇神即位年(前97)

となっています。神武と天武とを合わせて、崇神中心に整理しますと、

神武東征年↓(一九年関係) ↓崇神即位年↓崇神四道將軍派遣年↓(一九年関係) ↓天武壬申年

となっています。神武・崇神・天武の三者の大事業を、一応は結び付けているようです。しかし、神武東征年、崇神の將軍派遣年、そして壬申の乱という同じ性格の征服年が一九年関係ですつきりとはつながっていない点、そして、崇神即位年が神武の即位年なり崩御年につながらない点は、やはり紀年構成上のずれとしてよいでしょう。このずれを生じさせたのは、先に表1に示した、『書紀』完成期の文武天皇以降を、つまり、当時の現代を、神武また多くの先行天皇と結びつける必要を第一としたからです。

皇祖と、聖数で結びつかない天皇はあってはいけない、これが紀年構成の基本理念なのです。それが古代人の靈魂繼承への理解法なのです。『書紀』は、神武と久史八代を創り出し、歴史を古代に引き延ばしているのですが、その9代の天皇の即位年、崩御年を利用して、『書紀』完成時代の天皇を、古代に、また皇祖に結び付けているのです。現代人には理解し難いところですが、現在の自分の存在が、いかにしつかりと始原としての古代の靈力源につながり得るか、というのが重要なのです。

「元明書紀」の改変

年数関係の話が続いて辟易している人もおられるでしょう。歴史に関心を持っている人は多く文系で、数字を苦手とする人も多いことでしょうから。しかし、紀年を組みあげた史局の実務の人たちは、陰陽寮の博士たちの指導の下に参加した算師たちなのです。数字を操るのに苦痛を感じない、いやいや、数字を得意とする人たちでした。

古代史の基本は年数です。年数で組まれた『書紀』の紀年構成を通してしか、外宮の主祭神の問題も解決しないのです。『書紀』の改変、ここでは、「元明書紀」から「元正書紀」への成長を具体的に証明します(2)。

次は、神武の東征出立の日付けについての個所です。次のように出ています。

其の年の冬十月丁巳ひのとみづいたちのひのかるととり朔辛酉に、天皇、親ら諸の皇子・舟師を帥ひきゐて東を征うちたまふ(『神武紀』)。

東征の始まった日は「十月丁巳朔辛酉」とありますが、その日は10月5日に当ります。この日を次のように1月1日を基準において、時間を遡り、天武の即位日(2月27日)と対称的に並べてみましょう。

10月5日(神武出立日)

⇔ A (2か月と26日)

1月1日

⇔ B (2ヶ月目の26日)

2月27日(天武即位日)
Aは、神武が高千穂を下りて、東征への出立日から次の年の始まり(1月1日)までの時間。Bは、1月1日から数えて天武が神の場所である高御座(高千穂)に登る前までの時間を示しています。神武は年末から数えると2か月と26日目です。天武の場合は、年始から2ヶ月目の26日目です。日数で数えると85日目と57日目とは全く違います。しかし、この日数を、ただ数字だけ並べてみると、天武は年始から226、そして神武は年末から2226となります。1月1日を中心にして折り畳んでみると、2226の部分が重なります。

ここの2226という数字の組み立て方に『書紀』の数字の用い方の凄さを垣間見ることにあります。次の計算組み立て

方をまず見てください。

日本の開闢年数に関わる数字と関係があります。先に、天孫ニギノ尊が降臨して、この国を治め始めてから、もう「百七十九万二千四百七十余歳も経た」とある個所を紹介しました。その数字と深く関係するのです。

この日本の開闢年数である1792470余歳の解法を次に示しておきます。この大数の意味を知るための基本に、神武東征年（前667）から壬申の乱の年（672）までの1338年間があります。

その1338という数字を、2乗してみましよう。

$$1338 \times 1338 = 1790244$$

となります。この1790244という数字は、先の開闢年数に極めて近いのです。その二つの数の差は、

$$1792470 - (\text{マイナス}) 1790244 = 2226$$

で、2226しか違いません。

まず、この数字から考えられるのは、ニギの尊と天武の関係です。その両者の関係は、神武東征年を間に置いて次のようなものです。

ニギの尊降臨年

$$\leftarrow (1338 \text{ 年} \times 1338)$$

神武東征年

$$\leftarrow (1338 \text{ 年})$$

天武即位年

天武から1338年前に神武が東征に出立し、更に、その神武東征年を遡ること、1338年を1単位として、その1338倍もの前の年に、ニギの尊が降臨したということの意味しています。

そして次に、余りの2226部分について。

神武東征出立日から天武即位年までの数字の方が、開闢年数にたいして2226少ないのですが、この数字の部分に、この大数をより細かく解く鍵が潜んでいるのです。

2226は、天武元年（672）の1月1日から天武即位日（天武2年2月27日）までの日数と重なります。つまり、2226は、天武の即位日までの2年と2か月26日を意味したものであることが分かります。

先に見た神武の東征への出立日は、年末の方から数えると2か月と26日目、その日数を、ただ数字だけ並べて2226と書いたのですが、その数字の並べ方は、天武即位の年月日を参考にして、1月1日を真ん中にして切り抜きの紙相撲の力士のように折り重ねられているのです。

但し、この切り抜きの紙相撲にも少しずれがあるのです。天武が壬申の乱の年から即位するまでは、2年目ですから、その時間を並べると2226です。しかし、神武の東征にかけた時間は6年余ですので、そこに要した時間を縦に並べると6226となります。

神武の即位までの時間 6226

天武の即位までの時間 2226

です。神武と天武とは、下3桁までは重なるのですが、4桁目の年数のところに違いが生じています。これでは神武と天武とは完璧な一致ではありません。神武と天武との間には、ずれはなかった筈です。このずれがなぜ生じているのかについては具体的に直ぐ後で言及します。

それにしても、開闢年数（1792470余歳）として示されたひとつの数字の中に、ニギの尊降臨年、神武東征年・月・日、そして、天武壬申の年、その即位年・月・日とが同

時に組み込まれているのです。

古代の思考を単純、素朴と考えがちですが、このような発想を見せる史官たちには驚くばかりです。

柿本人麻呂は、高市皇子への挽歌（巻二、199）に、天武を、

天降りいまして天の下治めたまひ……

を詠んでいます。天武は天から降りてきて、この天下を治めたと言っています。つまり、天武はニニギの尊の再来であるとして詠んでいるわけです。そのように、天武をニニギの尊の再来として見る雰囲気といえますか、いや、もっと厳しく、そう見做すべく政治的な指導が官人たちには行われていたのです。そう言えば、神武の事も『書紀』では、数か所かに天孫神武と書いています。結局、神武、天武は、ニニギの尊なのです。回帰した同一の霊格なのです。

右に示した計算法によって神武の東征出立の月日も、天武の即位月日を基点にして決められたことが確認できたと思います。

「元明書紀」から『書紀』への証明

問題はここからです。天武の即位までの部分、2226の最初の2の部分は、神武と重なりません。両天皇は、年数の問題でも、折り返して全く重なってはいはずです。つまり、神武の東征に必要とした時間も、天武の要した時間に合せてあった筈です。その時間取りが、神武を誕生させた「元明書紀」の段階です。しかし、その年数に不釣り合いが生じているのです。そこに『書紀』の改変をはつきりみせているのです。神武は東征に6年以上も掛けています。天武は1年と少しです。その時間を示すと、

神武の場合

紀元前667年（神武出立年）

⇔ A（6年）

紀元前660年1月1日（橿原にて即位）

天武の場合

672年1月1日（天武元年）

⇔ B（1年）

673年（天武即位年）

です。AとBでは、そこに5年間の差があります。この差を始めから認めていたとは思われません。この5年間の時間の差は、神武天皇を誕生させた「元明書紀」の当初からの発想ではないでしょう。「元明書紀」においては、神武出立年から即位までの年数と、天武の壬申の年初から天武即位年までは同じ時間が記録されていたとしていいでしょう、完全な形で神武と天武とは重なっていたと。つまり、天武が神武の原像なのですから、神武は東征に6年も時間を掛けたのではなくて、その年数は1年余だったと。

「元明書紀」から現『書紀』に成長する時に、年数が動いているのです。神武天皇の方に手が加わっているのです。そこで「神武紀」の東征譚を細かく見てみます。すると直ぐ気が付くことですが、その東征6年間の内に、5年間ほどの空白時間が生じているのです。

神武の東征年（前667）から即位年（前660）までの経過を追ってみます。

前667年10月5日 東を征ちたまふ（東征の出発日）。

12月3日 安芸国に居る。

前666年3月6日 吉備の国に入る。高嶋宮といふ。三年積もる間に、舟を揃え兵食を蓄えて、

まさに一たび挙げて天下を平けむと欲す。

(★1、この後、東征再出発まで、3年1ヶ月の間の記録なし)

前663年2月11日 東征再出発、難波より白肩の津、紀の国、熊野と巡り、吉野へ入る。

前662年2月20日 天下を安定させる。

3月7日

「我、東を征ちしより六年になりにたり」と終戦を告げる。

(★2、天下平定を終わった時点から結婚まで、約1年6ヶ月、特別の記事なし)

前661年9月24日

結婚

(★3、次年の即位日まで3カ月の記事なし)

事なし)

前660年1月1日 橿原宮にて即位

★1、★2、★3のような空白期間がどうしてあるのでしょうか。★1には、舟を揃え、食糧を備えるために3年もの時間を費やしています。★2も、東征が終了したのに、そこで即位していません。次の年(前661)にも即位していません。★3は、神武が后と結婚したという記録だけです。ここも空白があります。★の1、2、3の空白期間を合わせると5年になります。つまりは5年の空白期間を置くことで、東征出立年を前667年にまで引き延ばしているのです。いや反対に、神武即位年が前667年であったのを、引き下げて前660年に設定した可能性の方が濃いかも知れません(3)。尚、前662年の3月までの時点では、4年間半の時間ですが、神武は、そこで6年になったと告げています。矛盾箇

所です。古い資料を書き直して生じたものでしょう。6年に引き延ばす必要がある史官たちの意識がついてしまったのでしょうか。

さて、神武の東征に掛けた時間も、天武が壬申の乱に要した時間も、それぞれの即位までの時間と重なる1年と3カ月であったわけですから。その神武と天武の完全な重なりが「元明書紀」の段階です。しかし、そこに、どうしても神武東征の年数に動いてもらう必要があったのです。

繰り返すことになりますが、『書紀』の最終段階で、更に後代の思惑が入り込んできているのです。神武の生涯(誕生年、立太子年、即位年、崩御年)を、現代の文武以降の天皇方と聖数で合わせるのが最大の命題となってきたのです。

(表2) の関係を創るためです。

(表2)

神武	天武	持統	文武	元明	元正	聖武
誕生年			一七		二三	
立太子年			一七			
即位年	三六五	一九	二三			
崩御年	一七	一七		一七・一九	二六	一七

(注、表2は、天武以降の各天皇の即位年を、神武と聖数で結びつけたものです。右には、聖数として、三才関係の一七、二三、曆数関係の一九、二六、三六五を挙げました。この論では扱わなかった三才関係の、聖数とされた一七(天9、地8の和)と二三(天と地に、人6を和した数)も挙げてみました。『書紀』の紀年構成が如何に聖数を用いて天皇間の関係を作っているか、それも『書紀』が記録した「持統紀」までではなくて、文武天皇以降の

天皇への配慮がなされているかが分かります。一例として一七という聖数を取り上げると、次のような関係線を創っています。

神武崩御年↓(一七年の倍数年)↓天武即位年↓(一七年の倍数年)↓持統即位年↓(一七年の倍数年)↓文武崩御年(元明即位年)↓(一七年の倍数年)↓元正讓位年(聖武即位年)

聖武の場合は、この一七年の聖数線が考慮されての即位でしょう。

表2を成立させるために、神武の生涯の節目は適切な年次に置き換えられたのです。いやいや、古代の天皇だけではなく、天武や持統までも、その元年や即位年は動かされている可能性があります。

創造主の神々

『書紀』は、1回きりの編纂で出来上がったのではなく、40年という長時間かけての大掛かりな改変がなされました。まず「旧辞」として伝承されてきた記録を基本に据えて、「天武書紀」が出来て、次に、「元明書紀」、更に現在の『書紀』までの成長の過程があったことを長々と書いてきました。初代天皇が崇神から神武へと変更されたことを証明するためにでした。

いよいよ外宮にとつて最も重要な主祭神の問題です。天武が、崇神と一緒に祭った天神は何という神であったか、ということです。

この問題を扱おうとして、わたくしは、やはり大きな壁に真向かうことになるのです。実は、天照大神よりも他に偉大な神が居たのだ、ということを書くことになるのですが、第二章でも触れたように、日本で一番偉い神は天照大神であるという常識の壁は高く分厚いのです。常識が誤っているの

はありません。『書紀』は天照大神を最高神としているのですから。

しかし、われわれは、天照大神より偉い、とは言わなくても、同格と見てよい神々が他にいることを知っているでしょう。恐らく、専門家以外は誰も、天照大神と同格の神の名を言えません。そして、ニギの尊を天から降臨するように命じたのは天照大神だと思っています。

昭和九年版「尋常小学国史」(上巻)には、「天皇陛下の御先祖を、天照大神と申し上げる。大神は御徳のたいそう高い御方で、はじめて稲や麦などを田畑にうゑさせたり、蚕をかはせたりして万民をおめぐみになった。」とあります。この教育が昭和二十年の敗戦年まで続きます。そして、その後、学校教育の中で、古代史(特に神話)についての教育はなされなかったのです。

そのような歴史教育の事情もあって、一般の常識では、天照大神が最高の神であり、その大神を祭っている内宮が最上の神社であるということになります。

しかし、天照大神よりも同格以上と言うべきか、天照大神よりも国家の始原に位置する神が存在するのです。

『古事記』を見ると、天照大神より前に、出現した神として3柱の神を挙げています。

その神の名は、

天御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神

とあります。しかし、誰がそんな名前を知っているのでしょうか。

一方、『書紀』本文では、最初の神は、天の神ではなくて、地上に現れた国常立尊を挙げています。その後、神世七代が続きますが、その名前は神ではなくて尊となっていま

す。イザナギの尊、イザナミの尊というように尊の呼称です。神という呼称より一段低いものです。そしてその後に、天と神との名前で飾られる天照大神が出現します。

『書紀』は、その完成期の国家理念を通して、神話的な世界を再構成しているのです。その立場で、天照大神に至って、天と神とを名前につけてあげたのです。天照大神をどうしても、際立てて最高神とする必要があったのです（後述）。

しかし、『書紀』も、一書（第四）として、『古事記』と同じ3柱の神を、天照大神より前の創造神として存在させています。『書紀』本文は、『古事記』時代までの神話を整理し、恐らく「天武書紀」にあった神々の名を尊名に変えて、一書として載せているのでしょう。

天照大神よりも前に天皇家の始源の神々が存在しているのだという認識が必要です。外宮側の説いた伊勢神道は、そうした始原神の中でも、『書紀』が一番最初の神とした国常立尊を、また『古事記』が最初の神とした天御中主神を、外宮の主祭神と主張したものが多くあります。

『古事記』を最高とした本居宣長は、そうした伊勢神道の立場を、怒りをもって強く否定しています（4）。

参考に、宣長の見解を書きますと、タカミムスヒを天照大神と並ぶ最高の神と認識しています。宣長は内宮の主祭神は天照大神、外宮は、最初はニニギの命であったが、丹波から豊受大神が遷って来てからは、豊受大神が外宮の主祭神となり、ニニギの命たちは傍宮となった。豊受大神は本来、天上で、天照大神が祭っていた食物の神である、としたのです。

外宮の主祭神

さて、わたくしは、「威霊再生の関係」を用いて外宮の主

祭神を指定します。

わたくしは、先に、外宮の第1回遷宮年の始まりが崇神天皇につながることを示しました。それは「天武書紀」の段階のものでした。

『書紀』が、古代史を、さらに上古代に構築していった時、つまり、崇神天皇より前に、神武天皇と欠史八代を創り出した時、天武が始めた神宮の創祀は、どのように位置づけされていたのでしょうか。

神武天皇が即位してから初めて皇祖神を祭ったという記録があります。

我が皇祖の靈、天より降りみて、朕が躬を光し助けたまへり。今諸の虜すでに平けて、海内事無し。以て天神を郊祀りて、用て大孝を申べたまふべし」とのたまふ。乃ち靈時を鳥見山の中に立てて、其地を号けて、上小野の榛原・下小野の榛原と曰ふ。用て皇祖天神を祭りたまふ。（神武四年二月二十三日条）

皇祖の靈が天から助力を与えてくださったおかげで敵を平定し、国土は安泰になった。今、天神を祭り続けていくことを誓います。そう言って、斎場を鳥見山に立てて、皇祖神を祭った、ということです。神武が皇祖天神の祭祀をしたという記録はここだけです。

ここに言及すべき二つの点があります。第1点は、暦（時間）の問題です。何故に神武が天神の祭りをしたのが神武四年（前657）とされているのか。そして第2点は、外宮の主祭神の問題で、神武がその時、祭ったのは何という天神（皇祖靈）であったかという問題です。

第1点、時間の問題

前657年、神武がなぜに、皇祖天神への祭祀を、この年

に行ったと記録されたのでしょうか。勿論、この年のような紀元前7世紀に神武が存在したわけはありませんし、この年に、皇祖天神を祭ったという記録もある筈はありません。従って、この年次を皇祖天神の祭儀の年として記述をする必然が、『書紀』完成期にあったということになるでしょう。ここまですて来たように、時間の問題は、実に精密に計算されているのですから。

そこで、聖数を用いて検討を加えます。

この前657年から一九年関係を求めて、時間を下つてくると、次のような関係線を描きます。

神武の皇祖天神祭(前657年)

← 627年間(一九年の33倍数)

崇神崩御年(前30年)

← 703年間(一九年の37倍数)

天武即位年(673年)

← 19年間(一九年の倍数)

外宮遷宮(第1回=692年)

となつています。神武の皇祖霊祭祀の年が、外宮の遷宮の源流年に当たっています。

『書紀』の時間の設定をする史官たちは、内宮の最初の遷宮年を、神武元年と関係づけると同時に、やはり外宮の始原年を上古代に求め、外宮の第1回遷宮年を一九年ごとに遡っていつて、一九年の71倍に当たる前657年にその記録を留めたのです。

第2点、祭神の問題

それでは、この前657年の祭祀の対象になった皇祖霊こそが、外宮の主祭神ということになるでしょう。すでに理解されたと思いますが、外宮の祭神は、ミケツ神とされている

神ではなく、ここで明らかになってきた「我が皇祖の霊」であつたのです。

さて、この時祭られた皇祖神の、その名ということになります。普通なら、神武天皇と一対となつた天照大神と推測するところでしょう。しかし、何故か『書紀』は、「我が皇祖の霊」「天神」、そして「皇祖天神」を祭ると書いていて、その天神の名前を明らかに記していません。「神武紀」には、天照大神の名前は多く出て来て強調されているのですが、この皇祖神の祭儀の場面では、天照大神の名前はまったく出てきません。「我が皇祖の霊」、「天神」、「皇祖天神」と表現を変えて書いて、天照大神と書いてありません。それは、この皇祖神が天照大神ではなかったからではないでしょうか。『書紀』は、その神の名前を明らかにしたくなかつたのかもしれない。

従つて、この名前を隠された皇祖天神はどの神であつたかが問題になります。大系本『日本書紀』頭注は、「この皇祖神とはタカミムスヒノミコトを指すのであろう」としています。何故なら「神武即位前紀の戊午年、九月条の丹生川^{うつしは}上で、天神の命によつて天神地祇を祭つた際に、天皇が顕祭^{うつついは}、つまり天皇自らがタカミムスビの霊を身に憑りつかせて神を祭る、という行為を行つているのを受けている」と解説しています。その通りだと思ひます。この見解に関しては学問的にも異議の出ない所です。

神武が、神武四年(前657)に行つた皇祖天神祭、その時に祭つた神タカミムスヒこそ外宮の主祭神だつたということになります。

古代史を、崇神天皇よりもさらに上古代に延長して設定した『書紀』の史官たちは、聖数信仰に基づいて、一九年を1

単位として時間を遡って、その倍数年に当たる前657年にタカミムスミを祭る年を設定したのです。ただ、その時に祭った皇祖神をタカミムスヒとは明示できなかったのです。元明時代以降は、内宮に祭った日の神、天照大神に重点が移っていたからです。

内宮の天照大神と神武天皇との組み合わせを第一の大切とするなら、外宮の祭祀を消してしまえばよかったのです。また、『書紀』に記録しないことも可能だったでしょう。しかし、『書紀』が、このように外宮の神祭りを皇祖天神の祭儀として消さなかったのは、天武発信の神祭りの宗教的力が、『書紀』完成時代には既にあったからでしょうか。神祭りを消すということはあり得ないことでしょう。

タカミムスヒノミコト

タカミムスヒ、まず天武天皇によって最初に神宮に祭られた神ですが、われわれからは全く遠い存在、忘れられてしまっている神です。この神はどんな神だったのでしょうか。

タカミムスヒノミコトは、『書紀』では高皇産霊尊と表記されています。『古事記』では、高御産巢日神と、日神と表記されています。しかしまた別名があつて、高木神ともあります。「山城国風土記」には、「天照高弥牟須比命」と、「天照」と太陽神として書かれています。

タカミムスヒは、天孫降臨の場面では、天孫降臨の命令を下すという大役を果たす神です。タカミムスヒは、出雲を平定し、出雲国に国譲りをさせ、地上を安泰にしてから天孫を降臨させた神です。

『書紀』の本文（「神代下、第九段」）を引用しておきます。時に、高皇産霊尊、真床追衾を以て、皇孫天津彦彦火瓊

瓊杵尊に覆ひて、降りまさしむ。

つまり、『書紀』本文は、天孫降臨の司令神としてタカミムスヒとしています。天照大神としているのは一書です。

「出雲国造神賀詞」にも、

高天原の神王、高御魂の命の、皇御孫の命に天の下大八島国を事避さしまつりし時に……。

とあります。タカミムスヒが皇祖となつていきます。「出雲国造神賀詞」というのは、出雲の国造が、代替わりの新任の際に、大和朝廷への服属の誓いをして、朝廷に申し上げる祝言、というものです。

天孫降臨を主導したのは天照大神だと、一般的には誰もが思っているでしょう。しかし、右に見たように、天孫降臨を司令した神はタカミムスヒでした。「高天原」の主宰神、つまり皇祖神はこのタカミムスヒでした。

「高天原」の主宰神が、タカミムスヒからアマテラスに変化したのです。上田正昭氏は「タカミムスヒのほうが、アマテラスオオミカミにさきだつ皇祖神であつた」と、説明しています⁽⁵⁾。岡田精司氏も、タカミムスヒを「大王家の祖神の位置にあつた」としています⁽⁶⁾。

大系本『日本書紀』を見ますと「葦原中つ国に將軍や皇孫を降す人は常に高皇産霊尊であつて天照大神ではない。（中略）また記では高皇産霊神とともに天照大神が中心である」と書いています。

先に書いたように、タカミムスヒは『古事記』のある箇所では、高木神と書かれています。『古事記』あたりから、精確に言えば、『古事記』が見たある資料では、天照大神の位置が高まつてきて、タカミムスヒが、日の神の地位から高木の神という名前に落ちていたのです。天に二つの太陽はあり

えないので、タカミムスヒを、天照大神と並び立てることが出来なくなってきたのです。

右に述べて来た点を、溝口睦子氏は「天皇の先祖である天孫に、地上世界（日本）の統治を命じて天降させたのは誰か」という問題は、実は研究者の間では、すでにかなり以前に決着がついている。すなわち、いま述べた「たかみむすひ」という忘れられた神が天孫に天降り^{（7）}を命じた降臨神話本来の司令神（主神）であって、「アマテラス」はあとからその地位についた後発の主神だということが、すでに共通の認識になっている。」^{（7）}と説明しています。また西宮一民氏は、『古事記』のある段落での説明で、「これまで、高御産巢日神・天照大神の順序であったのに、ここでは並列の順序が変わる。さらに次頁では、天照大神・高木神と変る。最初、高御産巢日神・天照大神の順序であるのは、元来、使者派遣の司令者が高御産巢日神であって、天照大神は穀霊としての機能で側に坐したためである」^{（8）}と、タカミムスヒと天照大神という新旧両神の交代していく関係を書いています。天照大神が穀霊として側にいたという点は説明が残りますが、『古事記』の記述の中で、天上の主祭神の交代が演じられているという指摘です。

アマテラスの誕生

「神武紀」（即位前紀）に、

昔わが天神、高皇産靈尊・大日靈尊……云々

おほひるめのみこと

とあります。タカミムスヒと並んで、オホヒルメとあります。オホヒルメの名前は、折口信夫が言うように、ヒル（太陽）とメ（妻・女）ですから、太陽神の妻を指すことになります。タカミムスヒが日の神ということになるのでしょうか。タカミ

ムスヒは、このヒルメと一対の日の神夫婦であったのでしょう。このヒルメ、この太陽神の妻こそ、天照大神の前身でしょう。

そう言えば、天武時代から持統時代までを活躍した柿本人麻呂は、持統三年に詠んだ長歌（巻一、167）日並皇子挽歌（に、天上において、地上に降す神を誰にするか相談があった時のこととして、天孫降臨を指示する司令神を次のように詠んでいます。

天照らす 日女之命（一云 指し上る日女之命） 天を

ば知らしめすと……

（天照らす日女之命は、（一云 指し上る日女之命） 天

上の世界を治めるとして……）

この歌ではタカミムスヒは登場しません。そして、女神で、後に天照大神に統合されていくらしい神を、ヒルメの命と詠んでいます。また、この歌には「天照らす」という詞がありますが、それは日（ヒ＝太陽）の枕詞です。天照大神というような固有名詞になっていませんから、「天照らす 日女之命は、天照大神と大日靈尊との中間にある神名表記」^{（9）}なのです。

人麻呂が、天上の司令神を、はっきりと固有名詞としての天照大神と知っていたら、必ず天照大神と詠みあげる筈です。人麻呂の歌は、ヒルメから天照大神へ移っていく名称の変化を教えてください。

天照大神という固有名詞は、「指し上る日女之命」（人麻呂歌一云）→「天照らす日女之命」（人麻呂歌Ⅱ689年作）という順序を経て、人麻呂より後に生れたと考えてよいでしょう。

人麻呂のような宮廷歌人の仕事は、歌という芸事に携わっ

たわけですが、その歌を通しての宮廷の報道官でもあるわけですから、その時代の政治思想をいち早く先取りして、官人たちへの教育・宣伝をするという役割も担っているわけです。人麻呂は、当時の政治思想の最先端を走っていたことでは間違いない、そこで歌を創っていたのです。

溝口氏は、その両神、タカミムスヒと天照大神の主役交代を、時間的な面で、次のように説明しています。「アマテラスを頂点として最高神とする神々の世界が、古代の日本には存在していたというイメージは、いまなお人々の間に根強く残っている。しかしそれは八世紀以降、律令制以降のアマテラス像をもとにつくられたものであつてそのような神々の世界は、七世紀以前の日本にはなかった。ヤマト王権時代に天の至上神として神々の頂点に立っていたのは、前章でみたようにタカミムスヒであり……」。

人麻呂の生きた時代より後に、天照大神という名の絶対的な太陽神である女神が、皇祖神として定着したのです。天照大神という固有名詞を持った女神の出現は、『古事記』の書かれた頃、710年前後ということになります。

以上、タカミムスヒを最高とする神話があつたこと、そしてその神話が、天照大神を最高にする神話に変えられていく、という過程を見ました。

祖母神と皇孫の関係の誕生

それにしても、どうして最高神をタカミムスヒから天照大神という女神に置きかえていく必要があつたのでしょうか。なぜ、タカミムスヒとニニギの尊という関係ではいけなかったのでしょうか。

なぜに、天照大神とニニギの尊という、祖母と孫の組み合わせ

わせになったのでしょうか。

そこには、現実が歴史に反映していることが指摘されています。持統時代から『書紀』完成期の元明・元正時代の時代認識が反映しているのです。

天武崩御後は女帝の時代であり、男帝待望の状況が続きました。

ひとつ前の時代、軽皇子を守り抜いて、文武天皇として王座に即かせた文武の祖母持統天皇の印象は強かつたでしょう。持統は、まさに皇孫を守り抜いた偉大なる祖母でした。それに続いて、再び現実として、孫である首皇子（聖武天皇）を帝位に即かせようとしている女帝元明がいるのです。この男王を期待した、持統から元明・元正への女帝時代の現実が、歴史（神話）に反映しないはずがありません。

過去は現実のお手本ともよく言います。過去は鏡ですが、それは歴史のある時代のことです。上古代史を創りあげていく『書紀』の場合は、その反対です。現実の姿が過去の鏡になつていくのです。王権と王権移譲のあり方は、持統が文武に王権を継承させた現実が、そしてまた元明が、首皇太子にと、願望、祈願する姿が神話の世界に反映しているのです。

史書構成の実質指揮官であつた藤原不比等を忘れてはいけません。彼が、元明即位の詔に持ち出した、天智天皇の不改常典は、皇位の嫡子相続を説いて、首皇子の皇位継承の絶対化を謀つたものと考えられます。そして今、つまり、『書紀』完成時において、数年後の外孫首皇子の即位を控えて、彼は、王権の橋渡しの典型を求めて、神話の世界という絶対的な世界に、祖母天照大神と皇孫ニニギの尊という関係を生みだしたのではないのでしょうか。

神話化することで、その神話が新しい歴史を保障したので
す。かくして、女神を主祭神とする神の宮を必要としたので
す。

二宮の陰陽の關係

天上の司令神は、代わっていきました。次のようになります。

7世紀、タカミムスヒ（男神）

7世紀末、ヒルメ（太陽神の妻）

8世紀前半、天照大神（祖母神）

神宮二宮の本来の祭神と、その祭神を誕生させた発想点を
纏めますと、

〈外宮〉

タカミムスヒ（男神）—— 崇神天皇—— 天武天皇——

〔「天武書紀」での発想〕

〈内宮〉

天照大神（女神）—— 神武天皇—— 持統天皇—— 〔「元明

書紀」での発想〕

となるというのが小論の見解です。

タカミムスヒはやはり男神でしょう。津田左右吉は、タカ
ミムスヒの性別について、イヅモ平定や天孫降臨の物語の行
動から判断して、「男性らしく考えられてゐたやうである。
少なくとも女性ではない」と書いています。「少なくとも女
性ではない」とは、ひどく遠慮ぶかい言い回しです。皇孫を
降臨させたのは、女神の天照大神というのが、常識というよ
り、教育の基本線にあったからでしょう。

タカミムスヒを男神とする点に関しては、まったく問題な
いと思います。それで、内宮は女神、外宮は男神を祭神とし

ているということになります。

建築の様式から見ても、外宮の建て方は男神の宮です。外
宮の社殿の千木の形状は、先端が地面に対して垂直に切つて
あります。外削そとそぎといひます。内宮の方は、先端が地面に水平
に切つてあります。内削うちそぎといひます。外削ぎと内削ぎと、つ
まり地平に対して垂直に立っている形の外削ぎは男性を示し
ているのに対して、内削ぎが女性を示しているとされていま
す。

それに、正殿の屋根にある丸い鰹木かつぎの数にも違いがありま
す。内宮が10本、外宮が9本と陰陽の組み合わせになつてい
ます。

このように建築の面から見ても、内宮は女神、外宮は男神
という外装を見せています。変えることのできない原初から
の姿としての神宮の建築様式も、外宮の主祭神が、男神のタ
カミムスヒであることを見せているのです。

ただ、内宮を重視する立場で、内宮を新たに創祀する時に、
外宮を併設しないで、一つの神宮に統一すればよかったので
はないか、とやや暴言気味なことを思ったりしました。不比
等の政治力ならそれも可能ではなかったでしょうか。

しかし、この内宮は女神、外宮は男神という内・外、男・
女の組み合わせには、陰陽の組み合わせが意識されているの
かもしれません。神宮創設の時代に、陰陽思想の影響が強かつ
たことは周知の事実です。社会思想としても政治的指針とし
ても「陰陽相補つて中庸なる」という思想がありました。陰
陽が揃わないとバランスが保てないというのです。

『書紀』と同じ時代の編纂物である「初期万葉」も巻一の巻
頭歌は、雄略天皇歌であり、巻二のそれは、磐姫皇后の歌で
す。これも陰陽のバランスをとった構成のようです。

右の点から、二宮の併設の説明ができるかもしれません。

しかし、歴史的に外宮の創設が早く、内宮は少し遅れていきます。外宮の第1回遷宮が692年であることはほぼ疑いないところですが、内宮は、持統即位年に、その遷宮年を置いてはありますが、その年は祖母神の創設の年という記念すべき年ではありませんが、実質の遷宮祭祀の年ではなく、実質の遷宮は、690年より遅れて、その一九年後の元明時代の709年からではなかったでしょうか。従って、最初から、陰陽思想によって、二宮の併設があつたのではないようです。

しかし、忘れてはいけないことは、宗教力とでもいふべきものです。『書紀』にも、神の崇りが語られているのですが、神の世界は恐ろしい世界なのです。その世界に人はただひれ伏するしかないのです。況や神の社を無視、破壊などとはとても出来ないことなのです。

この陰陽のバランスと、神への畏怖という二つが、内外の二つの宮の併設を許したのだと思います。

(続く)

注

- (1) 江口冽『日本書紀』紀年の研究
- (2) 元正天皇の時に『書紀』は完成したのですが、それ以降に、聖武に関する箇所、例えば「継体紀」の中の「百濟本記」に拠る改定などを加えた時点があります、つまり元正天皇の時期に、『書紀』へのさらなる加筆があつた可能性があります。継体紀の改変については、『日本書紀』紀年の研究』第二部、第4章参照のこと
- (3) 最終的な紀年構成をなした時点は、元正天皇の時です。元正の諡号を考えると、紀元を正したという意味ですから、この時に、わが国の紀元を前660年に決定したと見るべきかもしれません。
- 尚、『書紀』は、東征の甲寅年(前667)に、「是年、太歳甲寅」と書いています。この年を神武元年として前の記録(「元明書紀」)を残している可能性もあります。
- (4) 本居宣長「伊勢二宮ささ竹の辨」『本居宣長全集第八巻』筑摩書房昭和四十七年
- (5) 『日本神話』岩波新書、昭和四十五年
- (6) 「記紀神話の歴史的背景」『古代王権の祭祀と神話』昭和四十五年
- (7) 『アマテラスの誕生』岩波新書
- (8) 新潮社『古事記』の頭注
- (9) 寺川真知夫「高御産巢日神・天照大御神・伊勢神宮」『古事記神話の研究』塙書房2009年

〔抄 録〕

小論は、「神宮の本姿」の第三章です。

第一章では、式年遷宮は、本来、満一九年ごとの祭儀であったこと。

第二章では、古来、遷宮の式月式日は、外宮が9月16日、内宮が9月17日であった。この9月16日は、崇神天皇の「はつくにしらすすめらみこと」と呼ばれた、とされた日と重なっていること。外宮の祭神は、崇神天皇とかかわっていること。それは『書紀』成長史の最初の段階「天武書紀」での構想であったこと、を論じました。それが、今に続く外宮先祭という祭祀の日取りと関わっている点にも触れました。

第三章では、二宮の主祭神、特に、外宮の主祭神を論じました。「神武紀」四年条の神武の天神への祭祀が、タカミムスヒを祭るものであったことを聖数関係で確認して、外宮の本来の主祭神はタカヒムスヒの神であったことを述べたものです。

外宮は、天武天皇の発案で成ったと推測される「天武書紀」に基づいて、初代天皇と称された崇神天皇と皇祖タカミムスヒとを主祭神としていること。そして「元明書紀」から現『書紀』へと史書が成長する間に、現実の女帝時代を反映して、皇祖の神武天皇と共に女神天照大神を誕生させ、それを新たな神宮（内宮）の主祭神としていることを述べてきました。それぞれが一九年という聖数で計算されて、外宮は、天武即位年を起点として計算され、内宮は、持統即位年を起点として計算されていることも述べました。

加えて、二宮の建築様式において内宮が女神を、外宮が男神を祭神としている点に言及しました。

神宮両宮の本来の祭神（天上の皇祖と地上の皇祖）と、その祭祀執行者、その時代との間を結びますと、次のようになります。

〈外宮〉

タカミムスヒ（男神）——崇神天皇——天武天皇（『天武書紀』での発想）——7世紀後半）

〈内宮〉

天照大神（女神）——神武天皇——持統天皇（『元明書紀』での発想）——8世紀初頭）

神宮にはどうして二宮があるのでしょうか。

古代には、われわれが失ってしまった価値観があったのです。陰陽思想です。神宮創設の時代に、大陸の陰陽思想の影響が強かったことは周知の事実です。社会思想としても政治的指針としても「陰陽相補って中庸なる」という思想がありました。陰陽が揃わないとバランスが保てないというのです。